

詩人村上昭夫 原点探る

今年生誕85年を迎えた盛岡市の詩人村上昭夫(1927~68年)の記念フォーラム「こおろぎ忌」は13日、同市中ノ橋通のプラザおでっで開かれた。詩人らが参加したパネルディスカッションでは、詩集「動物哀歌」

で土井晩翠賞と日氏賞を受賞しながら早世した村上の生涯を振り返りながら、その詩の世界がどのように生まれたかを探ったほか、岩手の風土が生んだ優れた詩人の顕彰を続けていくことの必要性を訴えた。

生誕85年記念フォーラム「こおろぎ忌」盛岡

フォーラムには約200人が出席。盛岡市の作家高橋克彦さんがコーディネーター、詩人齋藤彰吾さん(北上市)、同北畑光男さん(岩泉町出身、埼玉県上里町)、同城戸朱理さん(盛岡市出身、神奈川県鎌倉市)、歌人岡沢敏男さん(盛岡市)の4人がパネリストを務めた。岩手中学(現岩手高校)で同級生だった岡沢さんは「軍国少年だった彼が、詩人になり日賞を受賞したというニュースを聞いて驚いた」と振り返り、終戦直前に官吏として渡った旧満州(現中国東北部)での一年半の苦難が、詩人としての出発点になったのではないかと指摘。

旧満州が出発点に 岡沢さん 病床で仏典を熟読 斎藤さん



詩人村上昭夫の生誕85年を記念して開かれたフォーラム

満州の広い地平線と空がこの表現に込められているように思う」と分析した。かつて村上が投稿した岩手日報の日報文芸で、詩の選者を務めていた。学校でいじめ城戸さんは、「山川草木悉皆成仏」、つまり草や木でさえ仏になるという日本仏教の概念を引き、「村上の詩が語るのには、あらゆる存在のなかに、かけがえない魂を見いだすことだったのではないか。それは宮沢賢治とも通だ。」

「か」に広大さ表現 北畑さん 賢治の世界に通底 城戸さん

結核治療のためサナトリウムに入院した村上が文化の代表の「か」と紹介した齋藤さん。これは「病院では仏典を深く読んでいた。退院後は、合評会のほか、詩人が芝居を上演するなどの詩祭に積極的にかかわった。当時は詩人が文化の代表の」と紹介した齋藤さん。これは「詩人と風土は深い関係がある。その土地における水、空気、感覚、風、光などが、詩人の身体としての言葉を鍛えていく。賢治の言語的な感覚は、村上昭夫の風土性と通底している」と応じた。北畑さんは「人を差別しないという考えを満州に行く前から持っていた。学校でいじめや差別の問題がある今、読んでもほしい」と呼び掛けた。最後に高橋さんは「村上昭夫顕彰をどういう形でしていくべきかを考えていかなければいけない」と結んだ。

「一番星」に兄の悲しみ凝縮 実弟・成夫さんが詩朗読



村上昭夫の作品を朗読する実弟の成夫さん

村上昭夫の生誕85年記念フォーラムでは同日、パネルディスカッションの後に、実弟の成夫さんが詩朗読を行った。成夫さんは「一番星」について「兄と妹に対して何もしないまま、闘病していた兄の悲しみが、凝縮され出ている気がする」と語った。成夫さんは「兄は聴衆は、村上昭夫の心が好きで、替え歌を情に共感しながら、その詩世界に浸った。」

村上昭夫「懐かしんだ。成夫さんは「雁の声」お母さん」「五億年」などの作品を、花巻市東和町在住の音楽家溝淵和雄さんのギター伴奏に乗せて読み上げた。